

## サーフィンを愛し、バリを愛する バリ旅行の第一人者

——丹野準二——

写文／高橋みづき

「旅もサーフィンも現実から離れる手段。それぞれのサーファーが思い描く理想のサーフトリップに少しでも近い環境を提供すること…それが僕の使命です」バリ島を中心としたインドネシアへのサーフトリップを専門に手掛ける旅行代理店ディトライインの代表、丹野準二氏はそう話してくれた。いま、バリといえば世界でも有数のポイントが密集するサーファーの楽園として人気が高い。日本人サーファーの海外渡航先ナンバー1にもなっている。目の前に海が広がるヴィラやエステ、ショッピングなどアジアリゾートとして常に観光客で賑わいをみせているバリだが、丹野氏が初めて訪れた25年前には、島で日本人をみかけることなどほとんど皆無と言つてよかつた。

### バリとの出会い

東京生まれの東京育ちの丹野さんが波乗りをはじめたのは18歳の夏、時は第二次サーフィンブームの真っ只中。日本の若者はウェストコーストスタイルに憧れ、海の向こうではジェリー・ロペスらが現役で活躍中だった。国内では横乗り系の遊びはまだまだ浸透しておらず、サーファーと言えば目立ちたがり屋ばかりで、暴走族あがりがほとんど…と言われる時代だった。丹野氏の場合は暴走族筋ではなく、お兄さんが湘南でサーフィンをしていたのに影響された。ショートボードで挑戦したのだが、一発で波乗りの難しさと楽しさに魅了され、大学でも迷わずサーフィン部に所属した。先輩で

バリに到着した法政大学サーフィン部。



丹野氏のサーフィン感を変えたメンタワイボートトリップのボート。

バリのビッグウェイブに挑戦する丹野氏。



メンタワイのボードトリップへ向かう港で。島を訪れる100人目の外国人として記念品を受け取っているところ。

中央の男性がワヤン・カントール。彼の左隣が丹野氏。バリ大会のジャッジたち。



**丹野準二** Jyunji Tanno  
1960年東京生まれ。  
18歳でサーフィンに出会い、ショートボード歴は30年。28歳でバリ旅行専門会社を立ち上げたバリ旅行、サーフトリップの第一人者。現在でも年に2度はバリを訪れ、サーフィンのほかゴルフや釣りも楽しむ。

Photos/his collection

### バリ専門の旅行会社が誕生

バリ島の素晴らしさを伝えたいと、その後も数年間彼は所属する任意団体が行う学生ツアーの手伝いを続けていた。最初の3~4年は海軍関係の実力者の家がホームステイ先だった。多い年は20名ほどと一緒にスティレ、バリのサーフィンを体験した。「ここは新しい観光地、サーフデスティネーションとして開拓の余地がある」何回も渡航するうちに丹野氏のその思いは確信に変わつていった。

そして1988年、彼はバリ専門の旅行会社「ディトライイン」を立ち上げ、「OM(オム)ツアーア」というブランド名でバリ旅行を展開していく。この「OM」には2つの意味がある。1つは英語の「OVERSEAS MATE CLUB」の略で、国境を越えた友情という意味が込められている。そしてもう1つ。バリは神々が宿る島と言われている。島のどこかで毎日神を崇める祭りが行われているとも言われている。神々の中でもっとも位の高い神を人々はオムと呼んでいる。バリには土着のバリ・ヒンドゥーという宗教がある。争いごとを嫌い、笑顔を絶やさない。人前で人を叱らないなど彼らの温和な性格を形成しているのだ。

### 親睦を深めるための努力

丹野氏が心がけていたことは、サーファーに限らずローカルに敬意を払うこと。人々反日感情はないが、やはりよそ者の日本人が我が物語で侵食していくば、摩

擦は当然生まれる。「だから常に謙虚な行動を心がけたつもりだし、一緒に行く仲間もそうしていた。サーファーだけではなく、とにかく幅広い世代、分野の人たちと知り合いになった。日本人旅行客は滅多に見かけなかった時代。日本人のイメージは僕らの行動にかかっていたんですよ」丹野氏のこの心がけは25年経った今でも変わらない。地道な努力のおかげでOMツアーアではこれまで現地住民とのトラブルなどは一切ないという。

バリの子ども達は幼い頃から波乗りを楽しんでいたが、丹野氏が会社を立ち上げた頃、サーフィンの大会などは島では行われていなかった。そこで彼が提案したのが日本とバリで年に1度ずつ開催する国際大会の実施だった。3日間かけて行うこの大会はビーチドッヂボールやパーティーオリジナルもあり、島をあげての一大フェスティバルとなった。インドネシアからエントリーが殺到し、この大会での優勝者が次回、日本で行われるOM杯に招待されるルールだ。バリの人々にとっては毎年待ちわびるほど楽しみなイベントだったのだ。

彼がインドネシアとの親交をさらに深めた背景に、1990年のある出会いが大きく影響している。宮崎で行われたISAのワールド・サーフィング・ゲームズにバリの選手のチームマネージャーとして来日していたのがワヤン・カントール氏だ。クタビーチのローカルサーファーである彼は、バリでも一目置かれるバリサーフィンクラブの重鎮だった。親切で面倒見がよく、多くのローカルから慕われていた

彼は丹野氏がバリを訪れるとき、いつも笑顔で迎えてくれた。現在のバリと日本の濃厚な信頼関係はこの2人が築き上げたと言っても過言ではない。2ヶ月前カントール氏は47歳の若さで急逝した。若すぎる死に丹野氏は大きなショックを受けたという。しかし、彼の残した良好なリレーションシップは若い世代のサーファーたちにもしっかりと受け継がれている。

### サーフィンの聖地へ

同社では、新規開拓時は何度も視察を繰り返し、プランを練る。様々なポイントを巡っている丹野氏だが、もっとも衝撃的だったのはスマトラ島の北西に浮かぶニアス島だった。アクセスが非常に悪く秘境と言われていた。しかし、訪れてみるとそこはサーファーにとって夢のような環境が揃っていた。深い湾の中のポイントはヤシの木に守られ、風の影響をほとんど受けない。また干満の差も非常に少なく、満月の日は24時間いつでもサーフィンを楽しめるという驚きの環境。丹野氏が訪れたときは100本中100本がパーフェクトなポイントブレイクだった。しかも手が届きそうなところで割れるのだ。こんな場所が存在することが、彼にとって驚きの事実であった。

また、彼のサーフィン感を大きく変えたのは10数年前に訪れたメンタワイへのボートトリップ。最小限の装備品を持ってヨットに乗り込み、24時間を海の上で過ごす。日の出とともに起き、日没とともに床につく。満点の星空が広がる日もあれば、

嵐が容赦なくボートを揺らすこともある。自然の脅威と背中合わせのその生活が、自然への敬意を高め、自分に素直に生きることの大切さを教えてくれた。自分の命は自分で守る…普段は忘れてしまいがちだが、身一つで海に入るサーファーが常に持っているべきそうした思いは、この体験でさらに現実味を帯びた。

現在では、サーフトリップを扱う旅行代理店はたくさんある。中にはサーフィンの経験が乏しいスタッフが、無責任に旅行客を送り込んでいるツアーも目に付く。しかし、サーフィンは自然相手の命がけのスポーツだ。国内では体験できないサイズやパワーの波が体験できる海外でのサーフィンでは特に。そしてビギナーにはビギナーとしての振舞い方も当然ある。だからOMツアーアではユーチャーのサーフィンレベル、経験、知識、考え方などをじっくりカウンセリングし、時として希望に添えない場合もあると言いつつも、それは、素晴らしいバリの海で、満足の行くサーフトリップをして欲しいからだ。サーフィンを愛し、バリを愛する丹野氏だからこそ提唱する条件なのだ。バリモリゾート化に伴い、水質や波質が徐々に悪化している。丹野氏が惚れこんだ、素晴らしい自然環境を守るために、そこを訪れるサーファーの意識の高さも大きく影響するだろう。このバリの環境を大切にする意識をしっかり持つていれば、バリを知りつくした彼が、大満足のサーフデスティネーションを提案してくれるに違いない。